【論　文】

D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの独自性
－米国における実存主義ソーシャルワーク諸論の比較研究－

田嶋　英行*

要約

「疎外」に悩むクライエントを援助するために展開された D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークには，他の論者によるものにはない独自の見解が存在する．本稿では Krill と，Bradford および Weiss における見解を比較することにより，その独自な点を明らかにする．

実存主義ソーシャルワークの成立要件，すなわち 1)「疎外」をクライエントの人間としてのあり方における問題として規定していること，2) クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，さらに何らかの社会的アプローチによって対応していること，以上 2 点をこれら 3 者がいかに満たしているかについて検討をおこなった．その結果，1)は 3 者ともに満たしているものの，2) は Krill のみが満たしていた．Krill の独自性は，これら 2 つの成立要件を満たすことによって，より完全なかたちで実存主義ソーシャルワークを成立させている点にある．

キーワード

「疎外」・2 つの成立要件・ソーシャルワーク

1. はじめに

Donald F. Krill は，米国における実存主義ソーシャルワーク（existential social work）の代表的論者である．彼は「疎外（alienation)」に悩むクライエントを援助するため，実存主義に基づいたソーシャルワークの援助の枠組みを構築した．ここでいう「疎外」とは，自らが存在する意味を把握することができず，自己が不安定な状態にあることを意味する．「疎外」に悩むクライエントは，「神経症的・精神病的な症状，対人関係の中で繰り広げられるゲームや試し合い，成功の追求や享楽的もしくは刺激的な気晴らしの追求，麻薬（薬物・アルコール飲料・タバコなど）の使用や乱用」（Krill 1978 : xiii）等に逃避することがある．

Krill は，自らによる実存主義ソーシャルワークの援助の枠組みを，1978 年に刊行された著書（Krill 1978）と 1996 年に発表された論文（Krill 1996）の両者をもって完成させている．しかしその援助の枠組みは，必ずしも彼ひとりが単独で構築したものであるとはいえない．なぜなら彼が自らの援助の枠組みを完成させる以前に，複数の論者が実存主義ソーシャルワークについて論じており，彼はそれらの見解を綿密に検討した上で，その構築をおこなっているからである．しかしその一方で，彼の援助の枠組みには他の論者によるものにはない点も見受けられる．つまり彼は，他の論者による見解をもとに，他には見ることのできない独自な点を発展させていったと考えられる

【＊東京都立大学大学院】

のである.

本稿では，Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組みと他の論者における見解を比較検討することによって，どのような点を独自に展開していったのかを明らかにしていく．なお Krill による実存主義ソーシャルワークの先行研究は，筆者によるもの（田嶋 2004a；2004b）以外では西光によるもの（西光 1982）と信川によるもの（信川 1998）が挙げられるが，どちらもそれを概観することのみを目的としているため，本稿のように Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組みと他の論者の見解を比較検討する内容のものとなっていない．従って直接的な意味で，本稿と同様の志向をもった先行研究は存在していないと考えられる.

2．比較検討の方法

まず Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組みについてであるが，それに関しては筆者が既に別稿（田嶋 2004a；2004b）において検討済みであり，本稿ではそれらにおける見解をもとに分析を進めていく．次に実存主義ソーシャルワークについて論じた複数の論者についてであるが，Krill 自身は論文の中で以下の論者の見解について検討をおこなったと記している（Krill 1996：255－256）．それらは，Taft, Rubin, Curry, Stretch, Sinsheimer, Frohberg, Salomon, Gyarfas, Imre, Bradford, Klein, Weiss, Brown, Swaine&Baird, Vontess 以上 15 名である．そして同論文の巻末に，これらの論者による文献をそれぞれ記している（Krill 1996：278－281）．Krill は，これらの文献を検討した上で，自らの援助の枠組みを構築していったと考えられるのである．しかし筆者が再度検討したところ，これらのうちの多くは，ソーシャルワーク実践の中で実存主義の思想をいかに活かしていくべきかについて論じた試論の域に止まったものとなっている．ただしこれらのうち，Bradford と Weiss の両者は，ソーシャルワーク実践の本質に実存主義の思想を指向する点があることを見出し，その上で実存主義に基づいたソーシャルワークのあり方について論じている．筆者は，これらの論者の中で実存主義ソーシャルワークについて真に論じている者として見做すことができるのは，この両者に限られると考える．従って本稿では，筆者が既に別稿において明らかにした Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組みと，この両者における見解とを比較検討し，どのような点を独自に展開していったのかを明らかにしていく.

なお比較検討の内容であるが，Krill と Bradford および Weiss がそれぞれ，実存主義ソーシャルワークの成立要件をどのように満たしているのかを明らかにしていく．その成立要件として筆者は，以下の点があると考える．それらはすなわち，1)「疎外」をクライエントの人間としてのあり方における問題として規定していること，2)クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，その上で何らかの社会的アプローチによって対応していること，以上 2 点である.

まず前者について述べる．実存主義（existentialism）において「疎外」は，人間としてのあり方における問題として規定される．実存主義の源泉とされる Kierkegaard は，「疎外」を「自分自身の人間としてのありかたに問題があるところから生じた事実」（飯島 1964：94－95）として考えた．そして，非本来的な生き方しかできない「疎外」された人間が，どのようにすれば本来的な生き方をしていくことができるようになるのか探求をおこなった．一方でこの Kierkegaard に先んじて Hegel は，「疎外」を精神における課題であるとした．彼は「疎外」を，人間の精神における弁証法

的発展の契機として捉えたのである．またこのHegelを批判し，「疎外」を労働における問題であるとしたのがMarxであった．彼は「労働力が売買される商品と化して，労働者本人の所有ではなく他人の所有になってしまった」（飯島 1964：93）ことに「疎外」の原因を見出し，弁証法的唯物論を展開した．

このように「疎外」の問題は，論者によってその規定が大きく異なっている．しかし実存主義においては，その始祖であるところのKierkegaardがおこなったのと同様に，「疎外」をあくまで人間としてのあり方における問題として規定する．従って，実存主義ソーシャルワークが「実存主義」に基づいたソーシャルワークであるためには，「疎外」をそのように規定している必要がある．これが1つめの成立要件である．

次に後者について述べる．実存主義ソーシャルワークは，あくまで「ソーシャルワーク」という援助の枠組みの1つであり，クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，かつ何らかの社会的アプローチによって対応していなければならない．ソーシャルワークは，クライエントの「疎外」の原因を心理的要因に求め，その内面の発展を促す心理的なアプローチによって対応する心理療法（psychotherapy）とは大きく異なっている．

心理療法，なかでも精神分析の流れを汲むものは，クライエントにおける疾患，症状，問題となる特定の行動などの原因をその「思考・感情・衝動・動機などの心理的過程に求めうるとする」（佐治 1979：10）心因仮説（psychogenic hypothesis）に基づいたものとなっており，クライエントの内面を変えていくことによって問題を解決していこうとするという．例えばJungは，「外的なことはすべて偶然的であり，ただ内的なことのみが実質的で決定的な価値を持」（ヴェーア 1994：4）つと考えており，その心理療法もクライエントの内面の発展を重視したものとなっている．

しかしソーシャルワークは，問題の原因をクライエント個人の中にではなく，むしろ社会のあり方の中に求めていく．そして，その社会のあり方に対し何らかのアクションを起こすことで問題を解決していこうとする．ここに，ソーシャルワークの独自性があるといえるのであり，実存主義ソーシャルワークが「ソーシャルワーク」として成立するためには，クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，さらに何らかの社会的アプローチによって対応している必要がある．これが2つめの成立要件である．

このように本稿では，Krill による実存主義ソーシャルワークの独自性を明らかにするため，KrillとBradfordおよびWeissの3者が，実存主義ソーシャルワークにおける2つの成立要件をいかに満たしているかという点について検討を進めていく．

3．Krillによる実存主義ソーシャルワークと2つの成立要件

このように実存主義ソーシャルワークが成立するためには，前述の2つの成立要件を満たす必要があると考えられるが，果たしてKrillによる実存主義ソーシャルワークは，これらの要件を満たしているといえるであろうか．以下，その検討をおこなっていく．

(1) Krillにおける「疎外」の規定[1)]

Krill において「疎外」は，自らが存在する意味を把握することができず，自己（self）が不安定な状態にあることを意味していた．ここでいう自己とは，「意識される自分」（すなわち客体）の

ことである．Krill によると，人間には「他者とのつながり（the bond with others)」が必要であり，他者との間で親密な交流をおこなうことによって，自らが存在する意味を把握することができるようになるという．つまり，自分が他者にとって必要不可欠な存在になることによって自らの存在する意味が明らかとなり，結果として自らの自己が安定することになるのである．しかし「疎外」に悩むクライエントは，「他者とのつながり」によって自らの自己を安定させようとはせず，自我（ego）の力のみによってそれを安定させようとするという．ここでいう自我とは，「意識する自分」（すなわち主体）のことである．Krill はこのクライエントの状態を，自我に囚われた状態（entrapment of the ego）と表現している．自我に囚われた状態にあるクライエント，すなわち「疎外」に悩むクライエントは，自己にのみ関心を向け，他者に対して関心を向けていこうとはしないので，「疎外」に悩み続けることになる．

Krill は，クライエントにおける「疎外」が，本来ならば「他者とのつながり」によって自己の安定を図らなければならないものを，自らの自我を頼みとし，その力によって自己を安定させようとすることから生じると考えた．つまり Krill は「疎外」を，クライエントの人間としてのあり方における問題として規定しているといえるのであり，先に挙げた 1 つめの成立要件を満たしていると考えられるのである．

(2) Krill における「疎外」の問題へのアプローチ[2)]

前述のように「疎外」に悩むクライエントには，自我に囚われた状態がみられるという．そして，自我の力によって自己を安定させるようになるという．その際には，「順応すること（conformity)」，「情熱的になること（passion)」，「理性を絶対視すること（rationalism)」，以上 3 つの手段を構ずることによって，不安定な自己を安定させようとする．ただしクライエントは，これらの手段のいずれを講ずる場合においても，自我（主体）と自己（客体）に分裂する．なぜなら，前者が後者を安定させようとするため，後者は前者の支配（コントロール）の対象になるからである．そして，本来「ひとつのまとまり」として体験されるべきクライエントの存在そのものに亀裂が入ることになる．

Krill は，「疎外」に悩むクライエントが自我（主体）と自己（客体）に分裂する背景には，帰属すべき共同体の喪失があると考えた．自らが存在する意味を与えてくれるはずの共同体を喪失しているため，自身の力によってその意味を獲得していかなければならなくなったのであり，もともと外部にあった意味付与の機能を，内在化せざるを得なくなったのである．結果として自己（客体）が自我（客体）の支配の対象となり，クライエントの存在に亀裂が入ることになる．

自我（主体）と自己（客体）に分裂したクライエントの存在が，本来あるべき「ひとつのまとまり」として体験されるようになるためには，自らが存在する意味を自身の力によって把握しないでも済む状態になければならない．かつて人々は，共同体という「場」に帰属することによってその意味を把握していたのであるが，クライエントは既にその共同体を喪失してしまっている．それゆえクライエントには，自らが存在する意味を把握することを可能にする新たな「場」が必要となる．そこで Krill においては，クライエントと複数の重要な他者（クライエントの家族や親族，または友人）との緊密なつながりを張りめぐらすことによって新たな「場」を形成し，それをクライエントに提供していく．そうすることよって，クライエントを「疎外」に悩むことから解放していくのである．

このようにKrillにおいては,「疎外」の原因をクライエントにおける帰属すべき共同体の喪失という社会的要因に求め，さらにクライエントと複数の重要な他者との緊密なつながりを張りめぐらすことによって形成される新たな「場」を提供するという，社会的アプローチによって対応することになる．つまり，クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，さらにその上で社会的アプローチによって対応しているのであり，先に挙げた2つめの成立要件を満たしていると考えられるのである．

以上のようにKrillによる実存主義ソーシャルワークは，先に挙げた2つの成立要件を満たしていると考えられるのであり，実存主義ソーシャルワークとして成立すると判断することが可能なのである．

4．Bradfordと Weissにおける見解

ここでは，前述したBradfordとWeissの両者による実存主義ソーシャルワークについての見解を検討していく．具体的には，この両者が先に挙げた実存主義ソーシャルワークの2つの成立要件について，いかなる見解を示しているのかを明らかにする．なお検討の順序であるが，各々の見解が最も端的に表れている主著が刊行された順，すなわち Bradford（1969），Weiss（1975）の順におこなっていく．

(1) Bradfordによるヒューマニスティックモデル

Kirk A. Bradfordは1969年に主著（Bradford 1969）を刊行し，そこで実存主義の思想を取り入れたソーシャルワークのモデルであるヒューマニスティックモデルについて論じている．

Bradford は同書において，従来のソーシャルケースワークのなかで重要視されてきた関係性（relationship）[3] という概念と，実存主義や実存主義的心理療法における鍵概念であるエンカウンター（encounter）の両者に，密接な関連があることを指摘している．ただし彼によると，関係性は「精神分析の理論枠組みから発展してきた医学モデル」（Bradford 1969：43）に基づいた概念であるのに対し，エンカウンターはソーシャルワーカーとクライエントが「『われ-なんじ』の世界において真に出会う」（Bradford 1969：47）ことを表現した概念であるという．前者は，ソーシャルワーカーがクライエントを治療の対象として客観的に見ることによって，クライエントを非人間的に扱っていく危険性を孕んだ概念である一方，後者は，ソーシャルワーカーとクライエントの両者が「生命の共感において交流しつつ相互主体的な『われわれ』として結ばれる」（岩永 1964：155）ことによって，クライエントに対して「より人間的」に対応していくことを可能にする概念である．そこで彼は，この関係性の概念にエンカウンターという概念を取り入れることによって補足し,「より人間的（humanistic）」なものに発展させていったのである[4]．

Bradford によると，ソーシャルケースワークにおける関係性の概念は，クライエントにおける自己決定，ソーシャルワーカーによるクライエントの個別化，クライエントにおける成長と変容の可能性への信頼，以上3つの特性によって構成されているという．一方のエンカウンターの概念は，クライエントにおける選択の自由，ソーシャルワーカーによる主体性の尊重，クライエントにおけ

る潜在可能性の実現，以上3つの特性によって構成されているという．そして関係性の概念における3つの特性が，エンカウンターの概念における3つの特性をそれぞれ取り入れることによって，ソーシャルワーカーとクライエントの「より人間的」な関わりのモデル，すなわちヒューマニスティックモデルが新たに構築されることになるという．またこのモデルは，以下の表[5]によって説明される[6]．

表1　Bradfordによるヒューマニスティックモデルの概要（Bradford 1969：61）

関係性の概念の特性			
1. クライエントにおける自己決定	クライエントは，本来的なあり方を選択していく自由を有している．ケースワーカーは，純粋に，非支配的に，暖かくクライエントに接していかなければならない．	真実と価値は，クライエント自身の中から見出されるべきものであり，またそれは他者との関係の中において実現されるべきものである．	クライエントは，その時々において自分自身の可能性を見出し，それに投企していくことができる．
2. ソーシャルワーカーによるクライエントの個別化	全ての人間には，威厳と価値が備わっている．クライエント自身がより完全に機能するようになるとき，彼は社会的に前向きな選択を行っていくことができるようになる．	クライエントは，唯一無二の存在として見なされるべきである．ケースワーカーは真の人間として，クライエントとの関係のなかに，危険を顧みることなく自分自身を投じていかなければならない．	各々の人間は，異なった潜在可能性を有している．クライエントの存在は，より人間的なものになる可能性を持っていると考えられなければならない．
3. クライエントにおける成長と変容の可能性を信頼する能力	クライエントは，自分自身がこれからなっていくべきものについて決める責任がある．また彼が自分自身のあり方を選択していくときには，同時に，他の人間を選択していくことになる．	クライエントの成長は，親密で，純粋で，密度の濃い出会いによってもたらされる．意味というものは，共感的な理解に基づいて把握がなされるものなのである．	人間（クライエント）は，彼自身の存在そのものに気づいたとき，自分自身の潜在可能性を実現する固有の能力を持つようになる．存在とは，実存が本質に先行するものとして捉えられるものなのである．
実存主義におけるエンカウンターの概念の特性	A. クライエントにおける選択の自由	B. ソーシャルワーカーによる主体性の尊重	C. クライエントにおけ潜在可能性の実現

このように Bradford は，同書において，従来のソーシャルケースワークのなかで重要視されてきた関係性という概念に，実存主義や実存主義的心理療法における鍵概念であるエンカウンターの概念を取り入れることによって，ソーシャルワーカーとクライエントにおける「より人間的」な関わりのあり方を提示したのである．

以上がヒューマニスティックモデルの概略である．このモデルは，ソーシャルケースワークの概念に実存主義の思想を取り込むことによって形成されることから，実存主義ソーシャルワークの1つのあり方を表現したものであると考えられる．それでは果たしてこのモデル，すなわちBradfordによるヒューマニスティックモデルは，先に挙げた実存主義ソーシャルワークにおける2

つの成立要件を満たしているといえるであろうか.

(a) Bradfordにおける「疎外」の規定

クライエントの人間としてのあり方における問題として「疎外」を規定していることが，実存主義ソーシャルワークの1つめの成立要件であった．Bradfordは，「疎外」に悩むクライエントを援助するためにヒューマニスティックモデルを提示したと明確に述べているわけではない．従って，「疎外」の規定も明確におこなわれてはいない．しかし，このモデルにおける見解を検討するならば，彼が「疎外」に悩むクライエントを援助するためにそれを提示したことは明らかであろう.

Bradfordによるヒューマニスティックモデルは，前述の通り，エンカウンターの概念における特性を関係性の概念に取り入れることによって構築された，ソーシャルワーカーとクライエントの「より人間的」な関わりのモデルである．このモデルにおける特徴は，クライエントが本来的な生き方ができるように援助を展開していくことを指向している点にある．それは「クライエントは，本来的なあり方を選択していく自由を有している」(1−A)，「真実と価値は，クライエント自身の中から見出されるべきもの」(1−B)，「クライエントは，その時々において自分自身の可能性を見出し，それに投企していくことができる」[7] (1−C)，「人間（クライエント）は，彼自身の存在そのものに気づいたとき，自分自身の潜在可能性を実現する固有の能力を持つようになる」(3−C) などの表現の中に見出すことができる．つまりヒューマニスティックモデルは，クライエントがソーシャルワーカーとの関わりを通じて本当の自分のあり方を見出し，その上で本来的な生き方ができるように援助を展開することを指向しているのである．従ってその援助の対象となるのは，自分の人間としてのあり方に問題があるため未だ非本来的な生き方しかできない，「疎外」に悩むクライエントであるということになる．このようにBradfordによるヒューマニスティックモデルの目的は，「疎外」に悩むクライエントの援助にあると考えられるのであり，また「疎外」をクライエントの人間としてのあり方における問題として規定していると考えられるのである．つまりそれは，1つめの成立要件を満たしているということになる.

(b) Bradfordにおける「疎外」の問題へのアプローチ

それではBradfordによるヒューマニスティックモデルは，クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，その上で何らかの社会的アプローチによってそれに対応するという，実存主義ソーシャルワークにおける2つめの要件を満たしているであろうか.

筆者が検討した限りBradfordは，クライエントが「疎外」に悩む原因をその人間としてのあり方に問題があるという点にのみ求めている．そして，クライエントがソーシャルワーカーとの人間的な関わりを通して，本来的な生き方を模索していくべきであると考えている．それゆえ，クライエントが悩んでいる「疎外」の原因を社会的要因に求めているとはいえず，かつ社会のあり方に対し何らかのアクションを起こすことでその問題を解決していこうとする意図を見出すこともできない．従ってBradfordによるヒューマニスティックモデルは，2つめの成立要件を満たしているとはいえないと考えられるのである.

このようにBradfordによるヒューマニスティックモデルは，実存主義ソーシャルワークにおける1つめの成立要件は満たしているものの，2つめの成立要件を満たしているとはいえないのであり，実存主義ソーシャルワークとしては不完全な形態をとるものと判断せざるを得ないのである.

(2) Weiss による実存主義ソーシャルワーク

David Weiss は 1975 年に主著（Weiss 1975）を刊行し，実存主義に基づいたソーシャルワークのあり方について論じている．この著書は，1962 年から 1972 年にかけて発表された論文[8] の集大成といえるものであり，彼による実存主義ソーシャルワークについての見解が端的に記されたものである．

Weiss によると現代に生きる人々は，アイデンティティの危機や混乱した状態に陥っており，「疎外」や孤独に悩まざるを得なくなっているという．現代のソーシャルワーカーが援助するクライエントも，さまざまな生活問題を抱えつつ「疎外」や孤独に悩んでいるという．従って現代のソーシャルワーカーは，クライエントが悩みつつある「疎外」や孤独に対して，何らかの援助をおこなっていく必要に迫られていると考えられるのである[9]．

しかし，従来の診断的で臨床的なソーシャルワークのみによっては，この課題を達成することができない．なぜならこの課題を達成するためには，クライエント自身を「疎外」や孤独から解放する実存的エンカウンター（the existential encounter）が必要となるからである．ここでいう実存的エンカウンターとは，クライエントが他者と出会うことによって，親密な関係を築いていくことを意味する．ひとは本来，他者との間に親密な関係を築くことによってのみ，生きる意味や目的を見出すことが可能な存在である．従って今日のソーシャルワークにおいては，「クライエントが抱えている固有のニーズを充足するだけに止まらず，ソーシャルワーカーと出会うことによって生み出される実存的なエンカウンターを提供していかなければならない」（Weiss 1975 : 19）のである[10]．

従来の診断的で臨床的なソーシャルワークは，Buber, M. による表現を用いるならば，「われーそれ」の根元語によって表される．これは，「経験の対象としての世界」（ブーバー 1978 : 9）を成り立たせる用語である．これに対して実存的エンカウンターが生じる世界は，「われーなんじ」の根元語によって表される．これは「関係の世界をうち立てる」（同前）用語である．つまり，ソーシャルワーカーが「疎外」や孤独に悩むクライエントを援助するためには，従来の診断的で臨床的なソーシャルワークにおける「われーそれ」の次元に止まることなく，実存的エンカウンターが生じる「われーなんじ」の次元，すなわち実存レベルにおいて援助を展開する必要があるのである．Weiss による実存主義ソーシャルワークは，従来のソーシャルワークのあり方を超え，実存的エンカウンターが生み出されるさらに高いレベルでのクライエントの援助のあり方を論じているといえる．

(a) Weiss における「疎外」の規定

実存主義ソーシャルワークにおける 1 つめの成立要件は，「疎外」をクライエントの人間としてのあり方における問題として規定していることにあった．前述の通り Weiss は，「疎外」や孤独に悩むクライエントを援助するために，実存主義ソーシャルワークを展開している．それでは「疎外」をどのように規定しているであろうか．彼はクライエントが悩む「疎外」について，以下のように考察をおこなっている．

人々は，不条理かつ不確実な現代社会において不安に苛まれるようになり，生きる意味や目的を把握しようと必死にもがくようになる．そして既製の完璧さ (ready-made perfection) を探し求め，陳腐な決まり文句や確信にすがりつこうとする．しかし実際には，これらの行為が実存的真空 (existential vacuum) の状態を生み出すことになる．因みにこの実存的真空という概念は，「疎外」と同義のものと考えられる．前述の通り，人間は他者との間に親密な関係を築くことによってのみ，

換言するならば「われーなんじ」の関係を築くことによってのみ，生きる意味や目的を見出すことが可能な存在である．つまり「疎外」は，クライエントが他者との間に「われーなんじ」の関係を築くことによってではなく，他の安易な方法によって生きる意味や目的を獲得しようとすることから生じると考えられるのである[11]．

このようにWeissは，「疎外」をクライエントの人間としてのあり方における問題として規定している．従ってWeissにおける実存主義ソーシャルワークは，1つめの成立要件を満たしていると考えられるのである．

(b) Weissにおける「疎外」の問題へのアプローチ

それではWeissによる実存主義ソーシャルワークは，前述の2つめの成立要件を満たしているであろうか．

確かにWeissは，クライエントが悩む「疎外」の原因を社会的要因に求めてはいる．
彼によるとクライエントが悩む「疎外」の背景には，「複雑な制度（complex institutions）や官僚組織の迷宮（bureaucratic labyrinths）」（Weiss 1975：18－19）が存在しており，また人々が「生産者と消費者が織り成す経済活動（the producer－consumer economy）の中に放り込まれることによって，あたかも物のように番号が付けられ，数えられ，分類されてしまう」（Weiss 1975：18）事実があるという．つまり，「疎外」の原因を近代社会のあり方に求めているのであり，すなわち社会的要因に求めていると考えられるのである．これは，前述のBradfordにおいては見ることのできない独自な点である．

しかしWeissは，このクライエントが悩む「疎外」に対して，何らかの社会的アプローチによる対応をおこなっているであろうか．彼によるとクライエントは，ソーシャルワーカーと出会うことによって生み出される実存的なエンカウンターを通して生きる意味や目的を把握することにより，「疎外」や孤独から解放されるべきであるという[12]．しかしこの彼の考えには，社会のあり方に対し何らかのアクションを起こすことで問題を解決していこうとする意図を見出すことができない．従って「疎外」という問題に対して，何らかの社会的アプローチによる対応をおこなっているとはいえないと考えられる．

このようにWeissによる実存主義ソーシャルワークは，クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，その上で何らかの社会的アプローチによってそれに対応するという，実存主義ソーシャルワークの2つめの成立要件を充分に満たしているとはいえないと考えられる．

以上のように，Weissによる実存主義ソーシャルワークもBradfordによるものと同様に，実存主義ソーシャルワークにおける1つめの成立要件は満たしているものの，2つめの成立要件を満たしているとはいえないのであり，従って，実存主義ソーシャルワークとしては不完全な形態をとるものであると判断せざるを得ないのである．

5．Krillによる実存主義ソーシャルワークの独自性

筆者はこれまで，KrillとBradfordおよびWeissがそれぞれ，実存主義ソーシャルワークの成立

要件，すなわち，1)「疎外」をクライエントの人間としてのあり方における問題として規定していること，2) クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，その上で何らかの社会的アプローチによって対応していること，以上2点をどのように満たしているのかについて明らかにしてきた．その結果を表で示すと，以下のようになる．

表2 Krill, Bradford, Weissによる実存主義ソーシャルワークと2つの成立要件

	成立要件1	成立要件2
Krillによる実存主義ソーシャルワーク	満たしている．「疎外」に悩む（自我に囚われた状態にある）クライエントは，自己のみに関心を向け，他者に対して関心を向けていこうとはしない．つまりクライエントが「疎外」に悩むのは，彼自身の人間としてのあり方に問題があることによるのである．従って，「疎外」をクライエントの人間としてのあり方の問題として規定していると考えられる．	満たしている．「疎外」の原因を，クライエントにおける帰属すべき共同体の喪失という社会的要因に求め，さらにクライエントと複数の重要な他者との緊密なつながりを張りめぐらすことによって形成される新たな「場」を提供するという，社会的アプローチによる対応をおこなっていく．
Bradfordによる実存主義ソーシャルワーク（ヒューマニスティックモデル）	満たしている．ヒューマニスティックモデルの援助の対象は，自分自身の人間としてのあり方に問題があることから，未だ非本来的な生き方しかできない「疎外」に悩むクライエントである．つまりこのモデルの目的は，「疎外」に悩むクライエントの援助にあると考えられるのであり，このモデルは，「疎外」をクライエントの人間としてのあり方の問題として規定していると考えられる．	満たしていない．
Weissによる実存主義ソーシャルワーク	満たしている．「疎外」は，クライエントが他者との間に親密な関係を築くことによってではなく，他の安易な方法によって生きる意味や目的を獲得しようとすることから生じると考えられる．つまり「疎外」を，クライエントの人間としてのあり方の問題として規定しているのである．	満たしていない．「疎外」の原因を社会的要因に求めてはいるものの，それに対して何らかの社会的アプローチによる対応をおこなっているとはいえない．従って，この成立要件を充分に満たしているとはいえない．

この図のように，1つめの成立要件については，Krill, Bradford, Weissともに満たしているものの，2つめの成立要件について満たしているといえるのはKrillのみである．例えば，Bradfordはそれを満たしているとは明らかにいえず，一方のWeissは「疎外」の原因を社会的要因に求めてはいるものの，何らかの社会的アプローチによる対応をおこなっているとはいえないので，やはりWeissもそれを満たしているとはいえない．従って，これら2つの成立要件を同時に満たし，実存主義ソーシャルワークとして成立すると考えられるのは，Krillによる実存主義ソーシャルワークに限られることになる．

そしてこれらのことから，Krillにおける独自性は，BradfordとWeissにおいて満たされることのなかった2つめの成立要件を充足している点にあることが明らかとなる．つまり，Krillによる実存主義ソーシャルワークの独自性は，1つめの成立要件を満たすと同時に2つめの成立要件をも満たすことによって，より完全なかたちで実存主義ソーシャルワークを成立させている点にあるといえるのである．

6．おわりに

筆者は本稿において，Krill による実存主義ソーシャルワークが前述の 2 つの要件を満たすことによって，実存主義ソーシャルワークとして成立していることを明らかにした．そして，クライエントにおける「疎外」の原因を社会的要因に求め，その上で何らかの社会的アプローチによって対応しているという 2 つめの成立要件を充足している点に，その独自性があることを導き出した．

Krill 以外の Bradford や Weiss らによる実存主義ソーシャルワークは，この 2 つめの成立要件を満たしていないため，クライエントの内面の発展を促す心理的なアプローチによって対応する心理療法の一形態として見做される可能性がある．しかし Krill による実存主義ソーシャルワークは，この成立要件を実際に満たしており，「疎外」の問題に対して社会的にアプローチしていく方法を整えているため，真の意味で「ソーシャルワーク」であると判断することが可能な援助の枠組みであると考えられるのである．

注

1) この節の内容は，田嶋による論文の見解（田嶋 2004a：303 - 304）によるものである．
2) この節の内容は，田嶋による論文の見解（田嶋 2004b：2 － 7）によるものである．
3) Bradford によると「ケースワーク理論の核心は関係性にある，と数多くのソーシャルケースワークの理論家が述べている」(Bradford 1969：42) という．
4) この段落の内容は，Bradford による著書の見解（Bradford 1969：43 - 60）によるものである．
5) なおこの表は，Bradford 自身が作成したものを，何ら手を加えることなく，忠実に和訳したものである．
6) この段落の内容は，Bradford による著書の見解（Bradford 1969：60 - 63）によるものである．
7) 投企（Entwurf）とは，自らの存在の可能性を未来に向かって投じていくことを意味する．
8) Weiss は，1962 年から 1972 年にかけて，実存主義ソーシャルワークに関する論文を 8 本発表している．
9) この段落の内容は，Weiss による著書の見解（Weiss 1975：18－19）によるものである．
10) この段落の内容は，Weiss による著書の見解（Weiss 1975：19）によるものである．
11) この段落の内容は，Weiss による著書の見解（Weiss 1975；40－42）によるものである．
12) この見解は，Weiss による著書の内容（Weiss 1975：20 - 21）に基づくものである．

文献

Bradford, K. A. (1969) Existentialism and Casework , Exposition Press.
Buber, M. (1923) Ich und Du, Insel Verlag. (＝1978, 田口義弘訳『我と汝・対話』みすず書房.)
飯島宗享（1964）「実存主義とマルクス主義」松浪信三郎・飯島宗享（編）『実存主義辞典』東京堂出版，92-97.
岩永達郎（1964）「出会い」松浪信三郎・飯島宗享（編）『実存主義辞典』東京堂出版，154－156.
Krill, D. F. (1978) Existential Social Work, The Free Press.
Krill, D. F. (1996) Existential Social Work, Turner, F. J. ed. , Social Work Treatment , The Free Press, 250－281.
西光義敞（1982）「米国における実存主義的ソーシャルワーク」『龍谷大学論集』421，2－23 .
佐治守夫（1979）「フロイトを中心とする心因仮説とその評価」佐治守夫・水島恵一（編）『臨床心理学の基礎知識（新装版）』有斐閣，10－11.
信川美樹（1998）「実存主義ソーシャルワーク研究 - D. F. クリルの Existential Social Work を中心に－」『同志社社会福祉学』12，103－115 .
田嶋英行（2004a）「D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークの援助の枠組み」『ソーシャルワーク研究』29，302-308.
田嶋英行（2004b）「D. F. Krill による実存主義ソーシャルワークにおける課題 －『疎外』の問題とその対応－」『社会福祉実践理論研究』13 ， 1－12 .
Wehr, G. (1985) Carl Gustav Jung : Leben, Werk, Wirkung, Kosel－Verlag GmbH&Co. (＝1994, 村本詔司

訳『ユング伝』創元社.)
Weiss, D. (1975) Existential Human Relations, Dawson College Press .

The Uniqueness of Existential Social Work by D.F.Krill
—The comparative study of the frameworks of existential social work in the United States—

Tajima, Hideyuki

Abstract

This study is intended to identify the uniqueness of existential social work presented by Donald F. Krill, which responds to the clinical problems of "alienation". Although Krill's existential social work was built upon the theories of former theorists, such as Bradford and Weiss, the distinctiveness of Krill's existential social work is apparent.

The framework of existential social work consists of two fundamental factors: 1) "alienation" as recognized as a problem in one's life on a personal level, 2) the cause of one's "alienation" is found in society, not in oneself, and is dealt with by a social approach.

Theories of Bradford and Weiss contain the first factor and not the second. Only Krill's existential social work includes both factors; this makes Krill's framework uniqueness, and can be considered a more complete form of existential social work.

Key words

alienation , two fundamental factors, social work